

## 牛島満と沖縄戦

「国内での最大で最後の地上戦から学ぶこと」

牛島 貞満  
うし しま さだ みつ



## プロフィール

四十歳から沖縄で祖父（牛島満）の足跡を調べ始め、沖縄戦研究者や体験者、生前の祖父を知る方々を取材し、「牛島満と沖縄戦」をテーマに講話を行っている。現在は首里城の地下の司令部壕の調査活動が続いている。

○司会 皆さん、こんにちは。ただいまより二〇二一年度講座「生きること」の第二回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。講演に入ります前に、本日お招きしました講師、牛島貞満さんのプロフィールをご紹介します。牛島さんは、一九五三年に東京でお生まれになり、二〇一七年三月まで、東京都公立小学校の教員として勤務されてきました。おじいさまは、沖縄戦を指揮した旧陸軍第三十二軍司令官であった牛島満中将です。牛島さんは一九九四年から沖縄でおじいさまの足取りをたどり、沖縄戦の実相を学び、平和教育にも生かしてこられました。現在も調査活動を続けながら、沖縄戦と基地問題に関して、全国で講演されております。

それでは、牛島さんにご講演いただきます。皆様、拍手でお迎えください。（拍手）

○牛島貞満 こんにちは、牛島です。どうぞよろしく願います。

チラシには、このように書かせていただきました。「戦争は最大の人権侵害です」。ずっと、こう言われ続けていますけれども、その人権侵害がなかなか無くなりません。アフガニスタンでも大変なことになっています。今だけ見ると何かタリバンが悪いという話になっていますが、実は約四十年前にソビエトがアフガニスタンに介入をしようとして、それに対する反政府勢力にアメリカが武器供与をしたタリバンが勢いづいて、最終的にはアメリカと対立するという複雑な様相を示しています。その基本的なものの考え方は、武力でもって人の考え方をねじ伏せる、あるい

は支配をするということが、やはり問題だろうと思います。

一般の私たちにとって戦争とは何なのかという、そういう角度から国内で一番最後に起きた、また最も大きかった地上戦から、私たちは何を学ぶのかということで、今日はお話をさせていただきます。

今、孫の世代の人がテレビに出たりしているということもあるんですけど、「さあ、司令官の孫が何をしゃべるのか」と、興味津々な方もいらっしゃるんじゃないかと思いますので、早速始めさせていただきます。

牛島満という名前は、教科書までは載らないですけども、多くの沖繩戦関連の出版物には必ず載っています。私の名前はこの下の一文字だけ違うということで、ある意味では私の生き方を規定されてしまっていることがあります。東京都大田区の多摩川の川べりにある小学校の教員を最後に、四年前に退職しています。祖父は、沖繩守備隊と言われていた第三十二軍の司令官でした。沖繩戦当時、陸軍中将の階級です。私はちょうど孫にあたります。

さて、沖繩は大阪からも随分離れていて、どちらかといえば中国大陸に近い位置関係にあるわけです。沖繩には離島が多くあります。「沖繩本島」と言いますが、国土地理院の地形図では、「沖繩島」といっています。

なぜ沖繩が戦場になったか。沖繩から東京まで約一五〇〇キロあります。グアムとかテニアンなどのマリアナ諸島から大型爆撃機B 29が飛んで、空襲が行われました。三月十日の東京の空襲、

続く十三日は大阪大空襲がありました。大体マリアナ諸島からの距離は同じぐらいですが、このB 29が一九四四年、沖繩戦の始まる一年ぐらい前に実戦投入されます。最新鋭機でした。こんなでかい飛行機にたくさんの爆弾を積むことができる、日本を降伏させるために開発した飛行機でした。航続距離が四八〇〇キロです。往復しないといけないので大ざっぱな計算ですけど、片道二四〇〇キロぐらいのところまでしか攻撃できません。それまでサイパン、テナアン、グアムなどの島々から飛んできたのですが、沖繩から飛ぶと、大阪まで一三〇〇キロ、東京まで一五〇〇キロとなり、これはずいぶん攻撃対象が広がります。北海道まで、それから中国の主要都市の全部が入ってしまいます。アメリカとしては、ぜひこの沖繩をB 29の発進基地にしたかったわけです。逆に、日本側としては、それを絶対やめさせたい、阻止したいというこの攻防だったわけです。

さて、これは小学校の教科書の数字です。第二次世界大戦、アジア太平洋戦争で亡くなったアジアの人々の数を概数として掲載しています。なんと中国は一千万人が亡くなっています。日本の三倍です。日本は三一〇万人です。朝鮮半島出身者は二十万人、東南アジアは合わせて九百万人で、日本の三倍ということ。第二次世界大戦はヨーロッパが主戦場だったと言われているんですが、アジアでもこんなにも多くの人たちが亡くなっています。この数字というものが一つ大きな意味を持っています。ただ、この数字だけでは語れないものがありますので、これからお話をしていきたいと思えます。

さて、沖縄戦で亡くなった人の数はどれぐらいかかっていうと、約二十万人です。これを枚方市の人口と比べてみます。枚方に今住んでいる約半分の人が、沖縄戦で命を失ってしまったのです。沖縄島南端の摩文仁（まぶに）に平和の礎（いしじ）があります。一九九五年、戦後五十年に建てられました。沖縄戦で亡くなった全ての人の名前が刻んである。ただし、全てと言っても、残念ながら、朝鮮半島と台湾出身の人の数は、実際の数よりもすぐ少ないと言われてます。それ以外については、できるだけ努力をして日本側もアメリカ側もイギリス側も、名前が刻んである。この一枚の石板に、日本名というと一〇人ぐらいを刻むことができます。一二二〇面で合計二十万人強になり、空から見るとこんな感じになります。

今日は、この平和の礎に刻んである二人、一人は屋宜（やぎ）和子さん。沖縄県出身で、0歳でお亡くなりになっています。もう一人は、私の祖父である牛島満。出身は鹿児島県となっていますけれど、実は東京生まれです。牛島満の父親は、牛島満が生まれる前に亡くなり、母親の故郷である鹿児島に戻って、実家の近くで育ちました。一応、鹿児島出身となっております。この二人を取り上げて沖縄戦を見ていきたいと思います。まず、沖縄戦の実写フィルムを観てください。

（ビデオ再生）「戦場の童（いくさばのわらび）」（短縮版）

○牛島貞満 これは、「戦場の童」という沖縄の一フィート運動が作ったビデオを二分間に縮めたものです。当時、アメリカ軍はスチール、あのパシヤット撮るカメラとカメラマンと、それから

ニュース映画と劇映画のカメラマンを動員して、従軍カメラマンとして沖繩戦を記録していました。日本も日中戦争の時期までは、映画館で映画が始まる前に十分間ぐらいの「日本ニュース」を流していました。アメリカも同じように、自分たちのやっている戦争が正義の戦争であるということを国民に知らせるために、こういう映画を撮っていました。したがって、アメリカに都合の悪い部分は写されていないというわけです。

じゃあ、日本側はどうしたのかというと、日本にははもう、その余力がなかったんですね。カメラマンはいましたが、フィルムを買うお金も、物も国内にはありませんでした。第三十二軍の司令部にも映画のカメラマンはいましたが、その人たちの仕事はありませんでした。さらに日本側が撮影した沖繩戦の写真というのがほとんどありません。そういう状態で、結局、沖繩の人たちから見れば、戦後に自分たちが体験した戦争を人に伝えようとすると、アメリカ軍の撮ったアメリカ公文書館にあるフィルムや写真を買ってきて、それをつないで沖繩戦の映画やビデオを見せるしかなかったんです。

映像にはダダダっていう音がついていたでしょう。あの音は、後でハリウッドでつけたんです。アフレコです。今は携帯電話で音声と映像を同時に撮ることは、すごく簡単にできるわけですけども、この当時は、映像と音声の同時記録はできませんでした。したがって、後からそれらしい音をつけています。

沖繩戦フィルムにはたくさんの方が出てきましたが、ほとんどがお年寄りとか子どもで、住民

でした。兵隊も出てきました。結構、亡くなった兵隊の写真も出ていますけれども、これは子どもに見てもらうために、ちよつとカットをしてあります。

さて、何で戦場にこんなたくさんの人がいたかっていうことを考えてみたいと思います。

まず 沖縄戦で亡くなった人の数です。アメリカ軍としては、一万二二五〇人です。これは確実な数字です。日本側としては約十九万人となります。米軍の場合は兵士のみ。日本側の場合には、日本軍の兵士、学徒隊の人たち、それから住民を合わせて十九万人です。約十五倍の死者が出ています。アメリカ軍の数字がはつきりしているというのは、こういう仕組みにあります。

アメリカ軍は兵隊一人一人が金属の認識票を身に着けている。ここに名前や部隊名も打たれている。亡くなると一枚は遺体に着けて、一枚は仲間の兵士が本部に報告の際に持って行きます。そうすると、いつどこで誰がどういう戦場で亡くなったかということが記録されます。後から遺体が回収された際も誰のものかわかるようになっていきます。

日本軍は一枚しかありません。これは、部隊名と番号しか書いてないので、誰のものか確認するのが後から大変です。だから、いまだにはつきりと名前が分からなかったり、日本軍の兵士らしいけれども、それが誰なのか分からないことが結構あります。アメリカ軍は、自国内でなく、海外に行つて戦争をすることがこれまで多かったです。そうすると、自分の息子や娘たちなど遺族には、何でどのようにして戦死したかをちゃんと報告しなければならぬわけです。

日本軍の場合はそうではなかった。もう死ぬのは当たり前で、遺骨収集をすると認識票が四、



五枚針金で結わえられて出てくることがある。軍隊の最小単位が班ですから、班長が兵士から取り上げて、まとめて埋めてから、突撃していくことになる。理由は、敵に部隊の位置が分かるからということらしい。その兵士がいつどこでどのように闘ったのかとか、亡くなったのかということが分からない状態にしてしまう。そういう意味では、一人一人の兵士の命の重さや尊厳が、一九四五年当時、アメリカと日本では大きく違っていたということで、それが、戦後の遺骨収集も含めて、大きく影響しています。

そのようなことがあって、日本側の場合は、兵士以上に住民の死者がはつきりしない。アメリカの場合は、その点かなり正確だということになります。

さて、日本側の死者の内訳を見てみます。約十九万人のうち、沖縄出身が十二万人、他府県の出身者が約七万人、うち大阪出身は二二三九人ということになっています。これを住民と軍人に分けてみたいと思います。学徒隊や防衛隊は、戦闘訓練を受けていないということからすると、かなり住民に近いので住民の側に入れました。沖縄県出身者のうち召集された正規の軍人を他府県の軍人に加えます。

軍人の死者は七万九二七三人、住民は十万八八六三人で、沖縄戦は、兵隊よりも住民が多く亡くなったという特徴をもつ戦争だということになります。では、なんで軍人、闘う兵士よりも民間人のほうが多く亡くなったかが問題になります。

次に日米の戦力を比べます。戦闘員の数です。日本軍は防衛隊、学徒隊を入れても十一万人、

アメリカは五十四万人で、戦闘員が四十万人で、後方支援でご飯を作ったり、陣地や道路を作ったり、橋をかけたり、そういう人たちも含めて五十四万人ということになります。日本と比べると一對五です。

次に武器の性能を見てみたいと思います。標準に歩兵が持っている小銃を比べてみました。日本軍は三八歩兵銃。これは、いい銃だという人たちもいるんですけども、一発パンと撃ちます。そしたら、薬きょうというのがあります。弾を撃ち出すために火薬がつまっている容器を銃からガチャンと引いて出し、また手動でもう一回ぐつと押し戻します。そうすると、二発目を打つためには、約三秒かかります。二発目を撃つために約三秒かかるんです。

米軍はいろいろな種類の小銃を持っているんですけども、一番多く持っていたのがM1カービン銃。これは一度に十五から三十発入る弾倉をガチャッと入れます。引き金を引くたびに薬きょうは自動的に出る。引き金を引いた回数分バンバンバンと弾が出る。そうすると、三秒間で十五発の弾を撃てるんです。これは兵士が一對一で一丁ずつの銃を持っていたら、この武器の性能の違いは、圧倒的に大きいんです。そんな力の違いがありました。

それから、船の数、軍艦の数ですけども、沖繩戦だけで日本側は一二八隻。アメリカ側は約二千隻です。さっきの兵隊の数が一對五だったことに比べれば、随分いいじゃないかと思うんですけれども、日本側はベニヤ板のモーターボート、震洋とかマルレとかいう船です。アメリカ側は鉄の船です。だから、もう数だけでは比べられない力の差がありました。

ところで、沖繩戦のキーワード「鉄の暴風」というのが出てきました。住民証言を聞いていると、「鉄の暴風はすごく怖かったんだ」とおっしゃるんです。今日は、その「鉄の暴風」を持ってきました。艦砲の破片です。これからお見せします。今日は全員に触ってもらいます。どうか。

○参加者 重たいです。

○牛島貞満 重たくてそれから、こういうところはどこですか（とがったところを指す）。

○参加者 端っこですか。こんなところが当たったら痛いですね。

○牛島貞満 痛いですね。痛いで済みますか。こんなのがビュンビュン飛んでくるんですよ。こうドカーンと破裂して、下からも横からも上からも飛んでくるんです。これが「鉄の暴風」です。艦砲の破片です。大阪の空襲もひどかったんですけど、あれは焼夷弾ですね。決定的に違うのは、焼夷弾での被害とこの砲弾での被害というのは、質がちよつと違うんです。

花火とどこが違うのか。ヒューって行ってドカーンと破裂して火花が出るところは同じなんですけれども、構造が違います。花火は周りが紙です。最近では花火大会がないですけれども、花火大会で風向きによっては焼けた紙がびらびらと落ちこちてきたりします。砲弾は周りが鉄です。これが、とがって割れるようにできています。それでもって建物や橋を壊したり、人を殺したりするわけです。

では、この「鉄の暴風」を踏まえて、六か月の屋宜和子ちゃんと四歳の男の子のお母さんで、

当時二十五歳の安里要江さんのお話を聞いてください。

〔ビデオ再生〕「安里要江さんの沖縄戦証言」

質問①「安里さんは、どうして疎開をしないで、日本軍について行ったのですか？」

（一九四四年沖縄戦が始まる前に、中国の方から沖縄に日本軍が駐屯してきた。）

「沖縄を守りに来たと思った。ああ良かった、助ける人が来たという感じで、良かったねえ、沖縄守ってくれるんだね。（日本の）兵隊が来れば、ここに敵が来ないということ。アメリカの兵隊の捕虜になったらダメだって、これが一番怖かったんです。アメリカの兵隊が上陸してきたら、（女性は）暴行を受けるとか、子どもたちを股裂きにするとか、男は戦車の下敷きにするとか、こういうことしか、私たちは教えられていません。この恐怖でもって逃げよう（と思いました）」。

質問②「実際に、沖縄戦が始まって日本軍は、住民をどうしましたか？」

（沖縄戦が展開されて、三月二十三日、米軍の艦砲射撃が始まったときに一番頼りにしたのは兵隊だった。）

「二番頼りにしていた（日本軍の）兵隊が、陣地で（私たち住民の避難を）指揮していないですね。『どこに動きなさい』とか、こういうのはあんまりなかったです」。

（安里さんが逃げたルート。四月一日、アメリカ軍読谷（よみたん）海岸に上陸。和子さんら家族、親戚二十人で南へ逃げる。四月二十九日アメリカ軍南下。途中で艦砲の集中攻撃に遭う。六月一日砲弾の飛び交う中、さらに逃げるが壕に入れない。次々と家族が亡くなる。六月六日、

兄嫁被弾で死亡。八日実母死、長男宣秀被弾。九日義母死。十日義父死。道には遺体が転がっている。

質問③「砲弾で家族が次々と亡くなっていきましたが、どうしましたか？」

「どこか空いている防空壕がないか、空いている石穴がないか、自然のガマがないかというところで、もう捜し求めてやつとの思いで姉が、『ああ向こうに壕らしきものが見えるよ、要江さん』(と言った)。行つたところがね、軍隊ですよ、日本の軍隊。怖いと思わなかったから、気安く助けてもらえるという意味で、その前に立ちはだかった、私たち。中から鉄兜を被って軍服をつけて軍靴をはいてパカパカと(日本軍の兵隊が)出て来た」。

「お願いします。この子たちだけでもいいから、この防空壕の中に避難させてくださいませんか」と言い終わらないうちに『馬鹿野郎』ですよ、『馬鹿野郎、君たち(住民)がここに居るか(追い詰められて)戦争はこのようになってるんだ。出て行け、出て行け』と、私たちにずっと連発した。出て行けならいいですよ。『そこに立っていたら、敵の電波探知機に探知されて、集中攻撃を喰らうよ』と。もうこの言葉がね、何かしら私たちには信じられないんです。あれほど私たちが頼りにしてきた日本の兵隊(友軍)なのに。なぜこんなことになってしまったのかな。涙も出ない、悔しさだけでいっぱいでした」。

質問④「やっとなれた轟(とどろき)の壕でどんなことがありましたか？」

「轟の壕の中は天井の高さがものすごく、人間が立つても上(天井)をつかむことができない

ぐらい（の高さで）、ガマが開いていた。とにかくその中に入ったら入り口にいたおじいさんに、『そこには友軍がおりませんか』ということ、これを聞きました。おじいさんは、『居るよ、居るよ。中に入ったらね、右側に横穴があるから、そこに入ったら日本軍、友軍がいるから、ここを通るときはそうつと通りなさい。静かに通りなさい』と教えてくれた」。

「でも中でも友軍は悪いことをしましたよ。友軍はみんなの前まで来て、着剣をしてガチャガチャと、壕の壁は岩盤ですから音を立てるようにして、『沖繩の皆さん、子どもを泣かすな。子どもを泣かすと殺してやるぞ』と言った。それが一番の恐ろしさでした。子ども泣かないでよ、泣かないでよ、兵隊、あれまでも兵隊さん付けです。兵隊さんに殺されるから。和子ちゃんも戦場の中を駆けまわるときは、背中に負ぶって、ひた走りに走ってここまで来ました」。

「やっぱり壕の中に入ったら、落ち着いて子どもを抱っこする時間があるので、すべて抱きめています。肌身離さずに、この子だけは守らなきゃいけないと。せっかくここまで生きのびてきたにもかかわらず、私の母乳はカラカラ。本当に一滴も出なかつたんです。そして乳房を口に当てても冷たい感じがしたのは、私はびっくりでした。もうみるみるうちに、和子ちゃんはガマの中で餓死なんです。これが十六日ぐらいだったと思います。一点の灯りもない中で、私の和子ちゃんは、私の手のひらの中で、息を引きとる。苦しかったですね」。

「でも、まさかアメリカの兵隊がここ（轟の壕）まで来て、私たちを捕虜にして救出するとは夢にも思っていませんでした」。

（轟の壕の周辺は地上の木々が砲弾ですべて吹き飛ばされた。すり鉢型をした壕の深いところの出入り口から、丸腰の米兵に手助けされながら、続々と子ども、老人、女性などの住民が救助された。安里さんの家族は、和子ちゃん（八か月）死亡、夫、宣佑さん（二十七歳）収容所で八月十二日死亡、宣秀ちゃん（四歳）収容所で十月一日死亡。一緒に逃げた二十人のうち、十一人が沖繩戦で命を落とした。）

○牛島貞満 胸がつまるようなお話でした。高校生に話すときに、「何で赤ちゃんは餓死したのでしょう」って聞いたら、「分からない」と言う生徒たちもいますけれども、結局、お母さんが栄養失調になって、お乳が出なくなりました。母乳が出なくなったことによって、まだ離乳食になっっていなかった和子ちゃんは餓死をしようというわけです。

屋宜和子さんがたどった運命をお母さんの証言を通して聞いていただきました。まず、なんでアメリカ軍の捕虜にならなかったのかというと、安里さんは、「米軍の捕虜になると、女は暴行を受けレイプされ、子どもは股裂きにされ、男は戦車の下敷きにされる」というふうに言われていて、それを信じていたからです。

だから、アメリカ軍の捕虜になるということは、もう到底考えられなかったということです。でも皮肉にも、アメリカ軍にその命を助けられたということになるわけです。安里さんは、結局、家族全員を失ってしまったので、北中城の実家のほうに戻られて、同じ名字の安里さんと再婚されましたので安里姓で戦後、生活をされていました。

ここに、琉球新報の沖縄戦新聞から記事を取っておきました。裏面には、去年に安里さんがお亡くなりになられた記事があります。九十九歳でした。最後まで平和の語り部をずっとされていきました。これから一分間の時間をとりまますので、感想をぜひ書いてみてください。今の戦争体験の証言を聞いてどう思われたでしょうか。

(感想記入)

はい皆さん、一生懸命書かれていますので、書きながらいいです。安里さんの証言というのは、実は映画になっています。「GAMA月桃の花」という映画をご覧になった方、いらっしゃるかもしれません。あの主人公です。

沖縄県平和祈念資料館では、ガマに避難した住民と日本兵がいる場面をろう人形でつくった展示があります。そのモデルにもなっています。その展示では泣き叫ぶ赤ちゃんの口を必死に押しさえている大人たちを描いています。問題になったのは、そのガマの中にいた日本兵の着剣をした銃の向きです。現在の展示は、兵士が何か住民を守っているように見えるのですが、展示を発注した段階では「赤ん坊を泣かすな」と脅すように赤ん坊に向けられていました。大田昌秀知事の時代に、あの展示をつくったんですけれども、稲嶺知事になったときに、展示に対する圧力がかかって、銃の向きが変わったということになるので、もし、沖縄に行く機会があったら、その銃の向きに着目してみてください。どう住民の体験を伝えるかというところに、やはり考え方の違いが表れます。



さて、一人目、屋宜和子さんの沖繩戦での運命を、お母さんの証言を通して見てきました。安里さんの証言をまとめると、軍隊は住民を守らなかつた。とても悔しい思いをしたということですね。じゃあ沖繩に來た日本軍というのは、何のために沖繩に來たのかということが大きな疑問になると思います。

もう一人、牛島満についてです。当時五十七歳で第三十二軍の司令官でした。私は六十八歳になりましたので、もう祖父の歳を十歳も超えてしまいました。

これは一九四四年の春、沖繩戦が始まる一年前のひめゆりの生徒達の写真です。後ろに寮が写っています。この寮の卒業記念の写真だそうですね。宮城喜久子さん。私は、祖父がどんな人だったのかというのを、沖繩の人たちに聞いてみました。当時、十六歳でひめゆりの生徒隊で、津嘉山（つかざん）の壕で実際に会ったそうですね。インタビューしましたので、聞いてみてください。

（ビデオ再生）「宮城喜久子さんが語る牛島満」

○牛島貞満 宮城さんも、一緒に学徒隊に参加した仲間たちを第三十二軍の命令によって多く亡くされたということで、第三十二軍に対して極めて批判的な方です。そういう角度で、全国を講演されていきました。ただ、牛島満祖父に関しては、「優しい感じの人だった」というふうにお話をされていきました。

それから、国吉永啓さん。この方は、私がお話を聞いた当時は、沖繩タイムスの基地担当の記者をされていきました。移民先のペルーから沖繩戦の一年前に沖繩に戻ってきて、ベッドのある新

しい家を建てていました。そのベッド付きの家を、軍の人に見つかつて、これは司令官宿舎に都合がいいということで、軍に接収された。ただ、家全部を接収されているわけじゃなくて、一番座という応接間だけを接収されていたので、同じ敷地内に国吉さんの家族は住んでいたわけです。国吉さんはちょうど六歳で、牛島満にも六歳ぐらいの子どもがいたので、すごく可愛がってもらつた。金平糖をもらつたり、馬に乗せてもらつたりとか、この方も「優しいおじいちゃんみたいな人だつた」と、その印象を語っていました。

牛島の家族にとつても、子ども好きで怒らず優しい、お酒が弱くて料理が好きと。ビールを一杯飲むと、真っ赤になつてすぐに寝ちゃうという、そこだけ私は似ているんですけども。

これは家族の写真ですが、この左側が私の父親です。目がくりくりして、すごくわんぱくだつたそうです。だけど、一度もどなられたり殴られたりしたことはなかった。今でこそ、家庭内暴力、あるいは部活での体罰は極めて糾弾されて、もう職を失うという状況になっていきますけれども、この当時は、殴つて育てるというのは当たり前だつた時代でした。その当ても暴力を使わずに優しい子どもとの対応だつたそうです。人当たりはともよくて、家族にも、それから沖繩の現地の子どもにも若者にも、優しい人だつたという印象をもたれています。

これは、第三十二軍を指揮した将校たちの写真です。当然、集合写真といえば、学校の集合写真と一緒に、会社の集合写真も社長さんが真ん中にくるので、司令官であるということです。司令官の役割は、①「決定する」。部下である参謀がA案、B案、C案と考えます。論議をしますが、

決定するのが司令官です。それから、②「戦争を始める」。大筋の命令は大本営から来るんですが、いつ始めるか、③「いつ終わらせる」かは、現地軍の司令官の極めて強い権限です。最初、第三十二軍は大本営直轄で作られました。その後、第十方面軍、台湾軍に組み入れられます。戦前は大日本帝国憲法の第十一条が、「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」となっていることから、日本軍というのは、実は国民を守るための軍隊ではなくて、天皇を守るための軍隊だったので。

大本営から下達された命令は持久戦でした。本土の防波堤、本土決戦のための時間稼ぎということです。漁村の絵にしてみました。港のある村の家や船が、天皇の土地（皇土）、これが本土です。沖繩は港の防波堤になりますが、その防波堤によって村や船は守られます。アメリカ軍が津波のように襲ってくると、この防波堤に子どもたちは、かわいそうだけど波にさらわれてしまふ。沖繩は波をかぶってもいいけれども、そのために本土は守られるという構図になるわけです。

沖繩占領の後、アメリカ軍は九州、鹿児島と東京に上陸をする計画になっていました。これに対して日本軍は大本営を長野県松代に移すための工事を進めていました。工事が開始されたのは一九四四年です。そのための時間を稼ぐ必要があったわけです。山の中に碁盤の目のようにトンネルを掘って、その中に家を建てて大本営を移設する。それから東京湾の湾岸要塞です。千葉県館山市の海辺近くの山の中腹に穴を掘り、ここにさっき出てきたあのベニヤ板のモーターボート「震洋」を格納します。ここから何とレールをひいて、まさにジェットコースターです。

海岸のコンクリートは滑り台なんです。ジェットコースターで勢いをつけて、ビューと海に飛び出して行って、たくさん来たアメリカ軍の軍艦に体当たり、あるいは操縦桿を固定して、その後は逃げるという特攻兵器を配備する湾岸要塞を造っていたのです。エンジンは、安い自動車のエンジンを使っていました。モーターボートの舳先には、火薬、爆弾が積んでありました。

さて、この持久戦、沖縄戦の作戦の目的を知っていたのは、この写真に写っている五十から百人の将校、実はこの人たちだけです。一般の兵士は知らない。もちろん、住民も知らない。だから、安里さんの証言で、「ああ、日本軍がやってきたね、強い日本軍がやってきたね」ということで、沖縄を守ってくれるのだと思っただけです。ここに、まず知識の上での大きな乖離がありました。

これからは沖縄戦の経過に沿って、何で住民の犠牲が増えたのかということを考えてみたいと思います。四月一日に米軍が上陸をします。本当は、台湾や鹿児島からの特攻機でやつつけるはずだったので。ところが、台湾沖海戦で飛行機をいっぱいだめにしてしまいましたので、配備が間に合わなかった。だから、アメリカ軍の上陸時に、沖縄島まで飛んできて攻撃することができなかつたということで、結果として無血上陸になったのが真相です。

北飛行場と中飛行場（今の読谷飛行場と嘉手納基地）近くの読谷海岸にアメリカ軍が上陸し、すぐに二つの飛行場が占領されました。

なぜ第三十二軍が上陸時に米軍を攻撃しなかつたのか、なぜ持久戦かというと、彼我の力関係。

さつき戦力比を見ました、一発撃つと百発返ってくる。だから、日本軍の一発目の大砲は当たるかもしれないけれども、大砲をどこから撃ったかって分かってしまいますので、百発ドカーンと返ってきたらそれでおしまいとなるので、そう簡単に攻撃はできない。第三十二軍は持久戦をとっていたんです。ところが、大本営から「攻勢に出なさい」、「何で飛行場を完全に取られたんだ」と言ってきた。また「本土が危ないじゃないか」、「B 29の発進基地になっちゃうじゃないか、飛行場を奪い返せ」、「敵に出血させなさい」と。大本営は、持久戦と言いながら「攻勢に出ろ」と相矛盾する命令を出してきました。上陸の様子を四月一日米軍撮影の実写フィルムで見たいと思います。

(ビデオ再生)「一九四五年四月一日米軍上陸、沖繩・読谷海岸上陸」

○牛島貞満 フィルムに何も加工してないと、こういう無音の状態になります。日本軍から攻撃されず米軍はのんびりと上陸しました。

これは、一九四五年四月二日の朝日新聞です。四月一日のニュースとして「沖繩本島に敵上陸」と書いてあります。字が細かくて潰れているので、下に書き出しておきました。どんなことが書かれているかというと、何と「四月一日に、アメリカの航空母艦を一隻撃沈しました」と書いてあるんですね。その他に、これだけたくさんの船を沈めましたって書いてあります。それから、「我が陸上部隊、果敢の邀撃（ようげき）」、「これは迎え撃つという意味ですね。午前十時頃、我が陸上部隊はこの敵を邀撃して、水際に撃滅すべく猛攻を浴びせかけている」と、攻撃しているって言

うんです。どうでした、攻撃してましたか。してないですね。それから、「特攻が六回も攻撃している」って書いてあるんです。四月三日付の新聞ですけど、大本営発表が掲載されています。小さいことを大きく見せかけるというのが大本営発表ですが、このときは違います。全く違う、一八〇度違うことを新聞に載せ、それからラジオで放送していました。陸上部隊は攻撃していないし、船も沈めていません。特攻機は六日からです。四月一日は飛んでいません。資料の裏に印刷してある「沖繩新報」は、現地沖繩で発行されていたタブロイド判の日刊紙です。全部残っていないですが、何とか四日の新聞を見つけました。この大本営発表も「壮烈な挺身斬込をした」、「敵を震え上がらせた」と書いています。それから「米軍の船を二十一隻沈めました」と書いています。確かに特攻機によって、軍艦の甲板がこういうふうには破壊したということがあります。でも、これは四月一日ではありません。二日でもありません。

四月一日に、アメリカ軍は読谷海岸に上陸して、沖繩島の北の方、日本軍の部隊がほとんどいなかったところは何と二週間で、辺戸（へど）岬まで占領しました。これから話すのは、南部の話になります。

さて、大本営からは第三十二軍に対して、持久戦ではなくて攻勢命令がきました。第三十二軍はその指示を受けて、内部ではいろいろ論議はありましたが、攻勢に出ます。四月八日、五月四日に大攻勢をかけます。しかし、さっき言ったように、一発撃てば百発返ってくるような状態ですので、ボロボロに負けてしまいます。仕方なく、第三十二軍は持久戦に戻ります。その

様子をビデオで見てください。

(ビデオ再生)「米軍上陸から五月二十一日首里司令部作戦会議まで」

○牛島貞満 そういいう状態の中で、首里の司令部で作戦会議が開かれます。首里城の入り口の守礼門の隣の城西小学校の敷地内にこんな鉄のふたがあるとこころがあります。一九九七年にその地下司令部壕跡に特別に入れてもらったことがありました。今から二十四年前になります。司令部内部はこんな感じですね。ここで作戦会議が開かれました。

まず、四月から始まって五月の末の情勢です。アメリカ軍が首里近くまでできています。首里の司令部はここで、日本軍がいるわけです。米軍の死者はビデオにあつたとおり、行方不明者を含めて五千人。日本側は、何と六万四千人。もうここで、十二倍以上の死者数が出ています。

先ほどの全体の兵士の数から引き算をします。米軍は、残り五十三万五千人です。日本側は、四万六千人に減ってしまいました。開戦時の兵力は一对五だったのが、もうこの時点で一对十一になってしまいました。

さあ、ここで皆さんに問題です。自分だったら、どちらの作戦をとりますか。①首里でそのまま戦うか、②南部に下がって戦うかです。

①首里でそのまま戦う。もう決戦はないので首里の持久戦になりますけれども、アメリカ軍が北側から攻めてきます。首里の司令部の周りには、多くの地下陣地があります。それから、食糧、弾薬は約一か月分ある。だから、周りを包囲されたり、地上を占領されたりしても、地下に潜っ

て戦い続けるということです。

もう一方です。②南部に下がって戦うというのは、北からアメリカ軍が攻めてきました。アメリカ軍が来る前に南部の摩文仁に司令部を下げ、首里近くにいる日本軍を南部に下げるといことです。この日本軍の移動については、軍事機密で住人には秘密ということになります。

さて、皆さんだったらどちらをとりますか。三分ぐらい時間をおきますので、資料を参考に①か②に丸をつけてください。よく大人向けの講演では、「いや、私は降伏する」という選択をとる方もいらっしやるんですが、人生必ずしもベストな選択ばかりではありませんので、あえて言えばどちらを取るかということで①か②のどちらかにしてください。それで、その理由を書いてください。では始めてください。それから立場は司令官じゃなくても結構です。住民の立場でも、一般兵士の立場でも。でも、アメリカ軍の兵士っていうのはやめてください。日本側のどの立場でもいいですから、自分で立場を決めていただいて、その理由を書いてください。どうぞ。

(回答記入)

では、①か②のどちらかに手を挙げてください。それでは、自分は①の「首里でそのまま戦う」というのがいいなと選んだ方、手を挙げてください。ああ、多いですね。②を選んだ方、はい。ありがとうございます。では、ここはぜひ意見発表をしていただきたいと思しますので、②を選んだ方で、意見を言ってもいいよという方、いらっしやいますか。ありがとうございます。よろしくお願います。



○参加者A 私、大阪の人間ですのでね、勝てないのが分かっているので、南部のほうへ逃げまして、まだあかんいうことで船に乗って逃げます。すみません。

○牛島貞満 はい、ありがとうございます。敵からなるべく遠くにといいことですね。もうお一方どうでしょうか。

○参加者B 首里は沖縄の中心ですから、中心を外して、できるだけ住人に影響もないということを考えて南へ下がるという、こう思いました。

○牛島貞満 はい、どの立場で考えました。

○参加者B やはりどっちかと言えば、命令する立場でしょうか。

○牛島貞満 はい、司令官という立場ということですね。ありがとうございます。お二方に拍手をお願いします。(拍手)

なかなか言いづらいですよ。今度は、①を選ばれた方、どうぞ。

○参加者C 作戦側として、移動のリスクもありますし、ここで駄目やったってことは、南部へ下がったとしても、同じことが起きるだろうと考えた場合に、南部へ逃げている人たちを助けることができるのかなというところで、このまま首里で戦う方を選びました。

○牛島貞満 はい、ありがとうございます。立場は何で考えましたか。

○参加者C 司令官の立場です。

○牛島貞満 はい、ありがとうございます。じゃあ、前の方どうぞ。

○参加者D 指令する立場で考えて、負けるというのはもう分かかって、持久戦に持ち込めるんやったら、防衛の整った首里のほうが、何か被害が少なくなるんじゃないかなと考えました。

○牛島貞満 はい、ありがとうございます。もう一方いらっしゃいますか。

○参加者E 私も指令する側で考えました。南部に撤退しても、多大な住民の犠牲が出ることは明らかですし、南部に下がっていくたびに食糧の供給を住民に強いたりしますので、軍人に首里で戦ってもらって、首里持久戦に持ち込むほうがいいのかなと思いました。

○牛島貞満 はい、ありがとうございます。じゃあ、実際はどうだったかということを見てみたいと思います。

(ビデオ再生)「五月二十一日、牛島司令官が決定した作戦は」

○牛島貞満 はい、実際に第三十二軍の牛島司令官が決定した内容は②でした。さて、先ほどのすごく活発な論議を聞かせていただいて、すごいなと思ったんですけれども、一つは「移動のリスク」とおっしゃっていました。撤退するときに、地下に潜っていた軍隊が地表に出てくるわけで、そこで攻撃される可能性は十分にあると、この当時は非常にありました。でも、成功したんです。なぜかと言うと、梅雨です。アメリカ軍は、夜になると戦争をしないんです。今はちょっと違いますけれども、この当時は夜になると戦争をしないんです。危ないから。それから、雨が降っているときも戦争はお休みです。飛行機が飛べないから。飛行機が飛んで、敵がどこにいるか、日本軍がどこにいるかというのを見つけて、それを無線で連絡をして、戦艦や大砲から

場所を決めてドーンと撃ってくるんです。だから、飛行機が飛べないっていうことは、大砲の撃つ目標が決まらないということで、攻撃をしなかったんです。

そのことがあって、結果としては、南部撤退そのものは成功しました。南部に下がるということだけはうまくいきました。先ほどの質問はどちらが正解というわけではありませんが、①の首里持久戦は、どちらかと言うと住民中心の考え方で①を選んだ人が多かった。ただし、一般の兵隊にとってみても、リスクがあるということで①を選ぶ人たちも多かったです。②の南部撤退を選んだ人は、どちらかと言えば、軍中心の考え方で選ぶ方が多かったと思います。

では、その②を選んだことによって何が起きたかです。まず、これは沖繩の小学校で授業をさせてもらいましたけれども、南部撤退の途中、通り道にあたる豊見城市の長嶺小学校で授業をさせてもらいました。総合的学習の時間が始まった頃でしたので、長嶺小学校の子どもたちが平和の礎のデータをもとにして、学区域の人がいつ亡くなったのかというのをグラフにしてくれました。何と三、四、五月はそんなに数多くありませんが、六月になると二一八人、五月の十倍もの数の人、実にその沖繩戦で亡くなった人のうちの七割の人が六月に亡くなっている。明らかに、南部撤退が、この地域の住民の犠牲を多くしたということがはっきりすると思います。

安里さんの証言を思い出していただきたいんですけれども、五月末までは皆さん生きておられました。ところが、六月六日、八日、九日、十日で、どんどんどんどん親戚、家族が砲弾にやられて亡くなるわけです。軍隊が住民の避難地域に下がってきたことによって、住民の犠牲がい

に増えたかということも、安里さんの証言をたどっていくと分かると思えます。

南部の住民証言の中で多いのは住民虐殺。これは、日本軍とアメリカ軍と住民が同じ地域の狭い地域に閉じ込められました。そうすると、住民の中にも、「もう戦争は嫌だから、捕虜になってもいいから」と投降しようとする住民を日本軍が後ろから銃で撃つ。また、集団自決で赤ん坊も亡くなっています。赤ん坊は自分で自分の命を絶つことはしません。ということは、親が子どもを殺す、兄弟で殺し合うということが起きたわけです。これは、南部だけではなくて、米軍の上陸した時や所でもあります。壕からの追い出しは、安里さんの証言で分かると思います。赤ん坊を泣かすなど脅す、食糧強奪の問題も含めて、この沖繩戦が悲惨と言われることの多くは、この南部撤退のこの時期、この地域に凝縮して起こるわけです。

それから、日本軍の兵士はどうかと言うと、「生きて虜囚の辱めを受けず」ということで、生きて敵の捕虜になることは、日本軍の兵士としては一番恥ずかしいことだと教えられていました。日本軍の軍規です。首里の南に南風原（はえばる）陸軍病院の壕があります。首里戦線で負傷して野戦病院の壕に収容されている日本軍の兵士で、一人で歩いて南部に行けない者は、毒殺されました。青酸カリを注射されたり、あるいは青酸カリ入りのミルクを飲まされたり、あるいは手りゅう弾を渡されて、「あなたたちは自決しなさい」ということで、その日本軍の負傷兵に対する虐殺がここで起きるわけです。

南部撤退については、大本営の命令ではないかとおっしゃる方もいらつしやるんですけど、根

拠がありません。これは、大本営と第三十二軍の電報のやり取りを見ていると、先ほど言いましたように、飛行場を取られたときは、かなり大本営から指導が入りました。電文でもそういうことがはつきりしています。ところが、この南部撤退のときには一切ありません。これは第三十二軍独自の見解で、判断なんです。ということ、南部撤退とは別の選択肢はなかったかということになるわけです。

さて、これは摩文仁の司令部壕になります。画面では南の海が見えますね。左側のほうには平和の礎があります。これが八十九高地、摩文仁の丘で司令部は、摩文仁集落側の階段の下から三分の二ぐらいのちよっと脇にあります。この辺りに入り口があって、海側の入口まで約八十メートル続いています。今、北側の集落側の入口から入っていきます。先ほどの首里の司令部壕に比べて、非常に貧弱な壕です。ここで指揮をして、五十三万人のアメリカ軍と戦うというのは到底考えられないわけです。

ここで六月十九日に、「最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし」という命令が出ます。もう司令部の命令で戦うのは困難であると、これからはそれぞれのグループに集まった日本軍の兵士の上の階級の者が指揮をして、最後の一人まで戦うこと。こういう趣旨の命令を出します。

さて、この命令で沖繩戦はいつ終わったか。住民にとってみれば、アメリカ軍の捕虜になった日が沖繩戦の終わりの日です。では、日本軍の兵士にとって、いつ沖繩戦が終わったのか。

①六月二十二または二十三日、慰霊の日。うちの牛島家の命日は六月二十二日です。摩文仁の

丘に建てられたこの墓標は六月二十二日になっていきます。それから、②八月十五日は、大日本帝國が連合国のポツダム宣言を受諾したことを天皇がラジオ放送をした日です。③八月十五日より後。さあ①②③のどれでしょうか。ちよつと頭の中で考えてください。はい、自分はこれって決めましたか。

(ビデオ再生)「日本軍として沖縄戦はいつ終わったか」

○牛島貞満 さあ、いつでしょうか。③ですね。沖縄戦は本土防衛のための時間稼ぎでした。しかし、本土はとつくに、もうポツダム宣言を受諾して降伏しました。それでも戦い続けなきゃいけない状態に陥りました。なぜかという、戦争を終わらせる役目、軍隊は上意下達の組織ですから、上から停戦命令が出なければ停戦してはいけないことになっているわけです。軍隊の中で一番重い罪は、敵前逃亡です。敵とドンパチャやっていると、「いや、僕は向こうのほうが強そうだから向こうへ行く」っていうのは、無しなんです。それは、軍法会議にかけなくても、その場で撃ち殺していいってことになっています。そういうことを踏まえた上で、戦争を終わらす役割の司令官が自決をしたことによって、終わらせる役割の人がいなくなってしまうわけです。他の戦争地域はどうかと言うと、中国大陸も軍隊の組織が残っているところは、みんなちゃんと停戦命令して、武装解除してという形を踏んでいます。

例えば、厚木の飛行場には、「敗戦を認めない、こんなのは嘘だ」と米軍に攻撃しようとした将校と部隊がいました。反乱軍として弾圧をされました。でも沖縄では、アメリカ軍と戦わざる

を得ないということが続いたわけです。終わらなき沖繩戦がつくられました。司令官が停戦命令を出し、武装解除をしなければ、兵士は戦い続けるしかない。「生きて虜囚の辱めを受けず」ということで、無意味な斬り込みの多発です。何百人という単位で、様々な地域で亡くなっています。証拠があります。益永大尉の訓令です。学徒隊の千早隊、通信隊を指揮していた益永大尉に、組織的戦闘終了後における沖繩本島の遊撃戦、つまりゲリラ戦の司令官に任ずると書いてありました。これは、牛島満の直筆の命令書です。祖父はこういう字を書いていました。

一九四五年十月に、鹿児島、大分に米軍は上陸する予定でした。オリンピック作戦って言います。それから東京湾の方は、コロネット作戦と言って、翌年の三月に上陸を計画していました。これはその作戦図です。国立国会図書館に残っています。例えば、関東にある高等学校で講話をしますが、今の学校の位置がアメリカ軍の進路図の赤い矢印のところにあたるわけです。もし、八月十五日に戦争が終わっていないければ、講話を聞いている生徒たちの何割かは、もしかしたらこの世に存在しないかもしれないという話をすると、生徒たちはびっくりします。本土決戦が行われ、米軍が関東方面に上陸すれば、それを迎え撃つ戦闘で、沖繩戦と同じように四人に一人が亡くなることになるわけです。

最後に長嶺小学校で二〇〇五年にあった授業の戦争体験の聞き取りの発表を聞いてください。

(ビデオ再生)「祖父の戦争体験の聞き取り(小学校六年生)」

○牛島貞満 二人目の女の子はおじいちゃんに「宿題だから、少しでも教えて」と言ったら、お

じいちゃんは目に涙をためて「絶対に教えない」と言われたことを発表しました。もしかすると、沖繩戦の体験者の中には、こういう方が多いのかもしれない。孫にも身近な人にも話せないようなつらい体験がある人が、たくさんいるんだということが、この女の子の発表から分かると思います。

聞き取りをしてから六年後に、一人目の女の子Oさんのお宅に会いに行きました。この写真がOさんのおばあちゃんです。当時十歳でした。話を直接聞くと、最初おばあさんが、一歳半の弟をおんぶして逃げていました。おばあさんが砲弾でやられ、その次にお母さんが一歳半の弟を負ぶって逃げていたんですけれども、お母さんも砲弾でやられました。仕方がないので、亡くなったお母さんからおぶりひもをとって、弟をおんぶして、必死に逃げたそうです。防空壕って言うんですが、防空壕じゃなくて大きな木の下まで必死に逃げて行って、やれやれと思つて弟を下ろそうとしたら、弟の上半身がなかったという話でした。どういふことかというと、砲弾の破片が当時十歳だったおばあさんの首の後ろ、背中の後ろを通ったんです。そのため、おばあさんの脇の下や背中にも小さな砲弾の破片が今でも入っているそうです。もし三十七センチ手前をこの砲弾が通ったら、どうでしょう。このおばあさんはひとたまりもなく即死です。ということはおばあさんがいなければ、このおばあさんから生まれたお母さんもないわけだし、このOさんもこの世に存在しないということです。人が住んでいるところが戦場になった。生きるか死ぬかは紙一重です。たった三十七センチの違いです。



私なりにまとめてみます。①軍隊は住民を守らない。②住宅地域での地上戦は孫子の代まで傷を残す。心の傷も体の傷もです。③戦争は人を変える。牛島満はとても優しい人だったと言われています。誰に聞いてもそう言われる。そういう人が、沖繩でかわいがった大事な子どもたちや青年たちが、死に至るような命令を決定しています。④意見の違いを、戦争という武力でもって解決をするのでなく、人間の知恵で解決をする。こんな悲惨になることだったら、多少自分が不利だと思っても、話し合いで解決する道を選ぶのが、この沖繩戦から学ぶ知恵ではないかなと思います。

南部撤退、最後まで敢闘せよとの命令というのは、住民の犠牲を著しく増やしたということになるのではないのでしょうか。

長時間になりましたけれども、一旦ここで話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ビデオ、その他写真、たくさんの資料を提示していただきまして、また分かりやすいお話をしていただき、ありがとうございます。

もう少し時間がありますので、ご質問がある方は、挙手願います。

○質問者A 沖繩戦の前に硫黄島があったと思います。そのときには、民間人を巻き添えにすることはなかったと思うんですけど、沖繩の場合に、そういうことを考えておられたのかどうかっていうことを、どういうふうに思われるかですね。

○司会 まとめて答えていただきますので、こちらの方、お願いします。

○質問者B 八十九連隊に所属をしておられる一〇一歳の方が、まだお元気になさっておられまして、約五十年間、八十九連隊の戦没者の遺族とか、戦死をなさった方のお世話をしておられ、あちらこちらに碑も建てておられます。もう高齢になられたので、沖繩に慰霊のために行くのが難しくなっています。まだご健在でいらっしゃいまして、戦争のことだけはしっかりと覚えておられて、私たちもいろいろと教えていただいています。改めて私たちもそういうふうにしなればと思います。ありがとうございます。

○質問者C ありがとうございます。ちょうど先週、テレビで取り上げられていたので見たんですけれども、当時、牛島満司令官のもとで働いていた女性の方が出ておられました。「牛島さんはちょっと違います」というように、おっしゃったんですが、あの方は、どういう体験というか、どういう経過の中でそんなふうと考えておられるのか、もし分ければ教えてください。

○牛島貞満 どうもありがとうございます。まず、住民を巻き添えにしたという点においては、少なくとも牛島司令官とナンバーズリーの高級参謀八原博通大佐は、米軍というのはどういう軍隊なのかということをよく知っていた人です。八原さんについて言うと、駐米武官をやっていた人なので、アメリカの日本大使館で働いていたこともあるということ、アメリカ軍がどう合理的なものの考え方をして戦闘するのかというのは、よく分かっていた人です。私の祖父は、陸軍の士官学校の校長もしていますので、国際法規にも明るかったということを見ると、アメリカ

軍が住民を戦車で轢いたりとか、レイプ事件は確かにないとは言いきれませんが、その当時、住民が思っていたような、住民の虐殺や捕虜の虐待をする軍隊ではないということは、非常によく分かっています。

したがって、十万人の県外疎開、実際には八万人ぐらいが台湾と九州に疎開をしています。それから北部疎開、沖縄島の北部地域、日本軍のいないところに住民を疎開させる案を決裁する際の八原と牛島の間の会話が残っています。アメリカ軍は文明国の軍隊だから、住民に対するむごいことはしないだろうというやり取りをしています。ということは、南部撤退をせずに、その後日本軍は敗北をして、どんな形になるにしろ、首里で戦線が終わってれば、南部にいた人たちの大半は生き残ることができたわけです。またアメリカ軍は、捕虜にした住民を虐待しないことは少なくとも牛島と八原大佐は知っていたわけです。

もう一つ言うと、南部撤退をした後、戦線を立て直して何か米軍に反撃ができたかというところ、そんなことはありませんでした。ほとんど南部撤退は敗残兵状態でしたので、戦うことがほとんどできなかったのが実態です。だから、先ほど会場の皆さんに伺ったときに、司令官の立場で、首里において持久戦をするという方が何人もいらっしやっただけで、それはすごいなあと思います。多分、それでも戦争は終わらせることができたと思います。

もっと言うと、大本営が攻勢に出なさいというのと、持久戦という相反する命令、矛盾する命令を出していたので、どちらをとっても第三十二軍にとっては、大本営からの命令に反すること

なく方針どおり戦ったことになります。その上で、何で住民犠牲を承知の上で、南部撤退をしたのかという問題になると思いますが、多分、天皇に対する忠誠心だろうと私は思っています。時間がなかったので、詳しいことは述べませんが、そのように私は祖父を捉えています。

それから、沖縄でもいろいろな方がいらっしやいます。NNNDキュメント「祖父は司令官終わらせなかつた沖縄戦」が十月に放送されました。その番組には、第三十二軍に対して非常に許せないという立場の方と、いや司令官はいい人だったという人と私と三人が取り上げられました。番組でお会いした大嶺さんの体験を代弁するのは難しいです。当時司令部には結構女性が入っていました。大嶺さんは、筆生と言って秘書の仕事をされていました。その立場で「司令官として沖縄のためによく戦われた」、「立派な方でしたよ」とおっしゃっていました。

かなり年配の方が、ご自分の考え方を変えられるのはなかなか難しいです。私は、世代間の相違というのはあると思っています。私の家族も、私の父や母、叔父、叔母の世代はどちらかというところ、やはり祖父に対する信頼感というものが非常に強いので、私がこのような場でこんな話をしているとよく怒られます。

ただ、思うんですけれども、当時の青年たちの中には、本当に「国体」を守ろう、天皇中心の政治を守ろうと信じて生きていた方たちがかなりいたと思います。その考え方を、曲げたくないという気持ちはよく分かります。自分の青春時代を大事にしたいという気持ちは分かります。でも、戦後になって、かつてアジアに侵略していった戦争、やったことを客観的に見たときにど

うなのか。そうした学びの機会はあつたはずですが。例えば今の朝鮮半島が北と南に分かれているのは、確かにアメリカとソ連との関係ですけれども、そもそも日本が朝鮮を植民地化しなかったら、ああいうことにはならなかったというところまで振り返ってみれば、分かるはずです。やはりかつて犯した過ちを、今から見て、どうしたら同じ過ちをしないかを学ぶことが大事ではないかと思えます。

私は教員をやつていましたので、いじめが教室の中で起きたら、解決しなきゃいけないんです。それは教員の責任です。そこにいる子どもがいじめにあつたり、いじめをした場合には、教員はそれを指導して解決をするという使命を帯びています。それをあのときは、あんなひどい保護者がいたから、あんなひどい子どもがいたから仕方がなかったんだと言つたら、これではいじめは解決しない。子どもの人権は守られないわけです。次の一步が踏み出せないんです。その担任をしているときに解決できなくても、解決する努力をしなきゃいけないんです。これは、教員としての使命です。

このことを国や民族に置き換えれば、歴史の中で起きた悲劇や反人権的な出来事について、何が原因だったかを究明するのが歴史の役割で、その教訓を教育を通して次の世代に伝えていく努力をしななければならないと思います。

沖繩戦に関して言えば、私には責任はありません。私は戦後生まれですから、歴史を変えることはできません。しかし、沖繩戦での出来事が、どういうところに問題があつたかを明らかにし、

その内容を語り継いでいくことは、私に責任があると思います。もつと言うと、皆さんにもあると思います。

朝鮮半島で行ったこと、中国で行ったことも含めて、やはり戦後に生きる私たちは、過去の出来事を語り継いで行くことを回避することはできません。

日本は、過去の戦争について、一億総懺悔的な扱いで戦後を過ごしてしまいました。私たちも、その戦後のかなりの部分を生きていくわけですからけれども、戦争責任や侵略の事実をはっきりさせてこなかったことが、今のような現状をつくっていると思うんです。

ポーランドにあるアウシュビッツという強制収容所の戦争遺跡があります。そこは、学びの場になっていきます。ドイツなどでは、今でもヒトラーやナチズムを礼讃することは、法律でも禁止されています。日本の場合には、過去の戦争を指導した人たちの判断に対して、どこに原因があったのか、どこに問題があったのかということ、きちんと学ぶ場というのがないわけです。

広島原爆資料館は、原爆や核兵器が人類に対する犯罪だということをきちんと伝える場ではあります。では、かつて日本が中国や朝鮮半島、東南アジアに侵略して行ったことに対する反省を学ぶ場があるでしょうか。

もし、時間があつたら、第三十二軍の司令部壕の保存公開については、今取り組んでいるので、お話ができたらと思っておりますけれども、一応、お答えはここで止めておきます。

○司会 ありがとうございます。そしたら、続いて司令部壕のこともお話しいただけるのでし

ようか。

○牛島貞満 あと十分ぐらいよろしいですか。戦争によって人々の間の対立が生まれます。もうこれは厳然としてあります。被害にあった国民あるいは地域の人たちは、孫子の代まで惨禍の話は伝わります。「何であなたのおじいちゃんは、若いときに亡くなったの」。写真などを前にして、何故亡くなったかを話すことになる。これは、確実に伝わっていきます。

ところが、加害の側や軍隊の子どもたちは、その当事者が語らないことによって、伝わりません。例えば私には、祖父がどんな人だったのか、何をしたのかというのは、いいことだけは伝わるけれども、他のことは伝えられませんでした。「あなたのおじいちゃんによって、こんなにたくさんの方が亡くなった」という話を家族からは聞かされないわけです。

だけでも、もう第三代ぐらい、孫のぐらいの世代になると、過去の事実を歴史的な事実として共有することは可能だと思えます。私は今、沖縄に行つて、「あなたのせいだ、私のおじいちゃんやおばあちゃんは殺されたんだ」という人には、まだ出会ったことがないです。私が出会った人は、沖縄戦について極めてよく研究をしているグループだったので、そういうこともあるのかもしれませんけれども、歴史認識の共有が、第三代ぐらいになると、多分できると思えます。そこで、やっと同じ土俵に乗ることができると思えます。

これは六月二十三日の平和の礎の写真です。四世代の家族が写っています。この真ん中の一昨年配のおばあちゃんの夫が兄弟が、沖縄戦で亡くなっているでしょう。子ども、孫、ひ孫の四

世代が、礎に刻まれている名前の前で、沖繩戦の話をします。伝わりますね。

首里城が二〇一九年十月三十一日に焼けてしまいました。とっても悲しいことでしたが、二〇二六年には首里城が再建される予定です。皆さんの中でカンパしてくださいました方もおられると思います。日本政府は素早く対応して、国の予算で首里城正殿等の復興を行うことを決定し、コロナ禍であつても着実に進んでいます。この首里城再興は、地下にもスポットを当てました。地上ばかりでなく、地下の司令部壕の公開はどうなっているのかと注目する人たちが出てきました。司令部壕は、首里城正殿の真下でなく西側の城壁の下を通っていました。坑道の全長は一千メートルちょっと、南北の直線距離で約四百メートルの大きな地下壕です。一九四四年十二月から建設が開始され、四か月の突貫工事で沖繩戦が始まってはまだ掘っていました。

今、インターネットの琉球新報のサイトを開いて、第三十二軍壕と検索すると、私が一九九七年に入坑した時の動画やその他の情報を見ることができます。

全国の主な司令部壕の表を見てください。一番大きいのは松代の大本営です。ほぼ出来上がっていました。全長が一万メートルあります。二番目は神奈川県の日吉台にある海軍司令部壕で、坑道は二六〇〇メートルあります。ここから戦艦大和に沖繩への出撃命令を出したと言われていきます。三番目は沖繩ですが、首里の南にある津嘉山に作った司令部壕です。でも強度が弱いというので、首里に新たに作り直すことになります。津嘉山の坑道は二千メートルで首里司令部壕の二倍ぐらいあります。



今日私が話したことは、沖繩戦の研究者たちが、ほぼ確定している中身です。そういうことを、この地下の司令部壕に入つて学ぶ機会があったら、「やはり戦争しちゃいけないんじゃないか」、「まあ砂漠や海の上でやるのはどうか分らないけれども、人が住んでいるところが戦場になったら、こういうことになるんだ」、「勝ち戦ならいいですよ。負け戦になったらこうなるわけです」ということが分かると思うんです。

先ほど言いましたポーランドにあるアウシュビッツ。ユダヤの人々は鉄道の貨車で運ばれ強制収容所に入れられ、ガス室などで大量虐殺が行われた。二〇二〇年八月にNHKスペシャルとB S1スペシャルで「アウシュビッツ 死者たちの告白」が放送されました。ガス室の地下に埋められていた謎のメモや壁のレンガに彫られていた名前を追った、七十五年の時を超えて真実に迫る優れたドキュメントでした。芸芸員たちの追究の鋭さを感じました。

かつてナチスドイツがやったことは、本当に許せないんだということが、人類の恥だつてということが分かると思うんです。だけど、あの時代にヒトラーユーゲントの若者たちは、ドイツ民族を高揚させるためヒトラーが必要な人間で、心底から尊敬をしていたわけです。一生をささげていたわけです。だけど、そのことが、客観的に見たら、他の民族から見たら、他の国民から見たら、どうなのかということをきちんと追究する必要があるわけです。忘れないために記録し、記憶することが大切です。

それで今、ドイツはちゃんと反省をして、それを後世に伝えて、学校教育で教育をして、それ

から観光で訪れる人にもガイドをつけて、そのことを伝えるということをずっとやっているわけです。歴史に真摯に向き合うことで、障害者やユダヤ人の大量虐殺という悲惨な過去を持つ国でありながら、ヨーロッパの中で、ドイツが孤立せず、今ではヨーロッパの政治の中心にいることができるのではないかと思います。

日本はどうでしょうか。アジアの中で、慕われているでしょうか。かつて侵略した国と仲良くやっているでしょうか。それぞれの政府と政治体制の問題とかいろいろあるかもしれないけれども、過去の歴史的な過ちによって人権が侵害されたことを、日本の次世代を担う若者たちに、後世に伝えていくでしょうか。残念なことに、歴史から学ぶ人権について、きちんと伝える学習施設を日本は作ってこなかった。そこに今のアジアでの日本の地位が低い理由があると思います。

南部撤退を決定した首里の司令部壕というのは、歴史上重要な戦争遺産であると思います。特に司令部中枢の第一坑道近くまで、一九九四年に大田昌秀知事のとくにたどり着いていたのに、ここで止まっていたことは残念です。この第一坑道を調査しないと全容は解明されません。この写真は首里城の木曳門（こびきもん）のすぐ近くに開いていた換気口の穴です。写真には米兵が三人写っていて、その後ろには高さ約八メートルの大きな岩もありました。この地上の換気口から地下三十三・五メートルに坑道があったのです。三十三・五メートルと言えば十階建てのビルと同じ高さです。これは司令官室です。この写真は、第三坑口といって、司令官室に近い入口を

米軍が後から発見しました。

沖繩県は、一九九七年に公開基本計画を公表していました。約三割の坑道の調査をしていました。でも米軍は一九四五年に八十六%まで調査をしていました。何で米軍はこんなに一生懸命に調査をしたかと言うと、本土決戦のためです。本土上陸作戦のために、日本軍がどんな陣地を作るかということ、丹念に専門家を入れてやっていました。米軍情報報告書を見ると、素人が読んでも分かるような、極めて綿密な調査をしています。

これは、去年の十月に司令部壕を東京の私立の小学生に案内しているところです。この下に、司令部壕があるんだよって話をしています。この写真は、保存公開を求める会の人たちが作った立体模型です。

地上にあるものは分かりやすい。燃えたり倒れたりしたら、分かるでしょう。地下に埋もれているものは、潰れても何しても分からないわけです。だけど、そこに司令部があったということ、やはりきちんと伝えていくということが大事かなと思って、そのお手伝いをしているところです。これで終わります。

○司会　ありがとうございます。最後になりましたけれども、今日、遠いところから来ていただきました牛島貞満さんに、もう一度、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、これで本日の講座「生きること」を終了いたします。本日はどうもありがとうございます。

